

総会基調講演

「変わりゆく障害者スポーツ」

講師 前大阪市長居障害者スポーツセンター館長

小林 智志氏

前大阪市舞洲障害者スポーツセンター館長

吉村 龍彦氏

前大阪市障害者スポーツセンター・スポーツ振興部次長

高橋 明氏



松本：進行役が初めてなので、よろしく願いいたします。3人が写っている写真を入手したので、まず見てもらいます。

プロジェクトに昔の先生方が映される

高橋：今日は私用のため、ここで3人で一緒に話せないのが残念です。38年間皆様方にお世話になりありがとうございました。3月末で退職いたしまして、3人とも再雇用を望まず辞めてしまったのですが、これからも障害者スポーツに何らかの形で関わっていきと思いますのでよろしく願いします。～中略～ 私の方は近畿障害者スポーツ指導者協議会の会長をさせていただきます。また何らかの形で関わりがあると思います。皆様長い間ありがとうございました。

松本：昭和49年にこの長居障害者スポーツセンターが出来た時からおられ、3人が同じ大学で同時に就職された経緯やいきさつなどお話ししていただければと思います。

小林：とりあえず、4月からゆっくりできるかなあと思っています。～中略～ 周りはほとんどが教師になっていたが、自分は教師にむかないし人前に入るのも苦手だし就職に悩んでいました。～中略～ 教師でもないし、スポーツもできる。正直言って「障害のしょの字」も知らない。ここで初めてやったスポーツもたくさんあり、その中で逆にどのように教えていこうかという面白さもあつたかなと思う。ある意味、魅力があつて毎年毎年いろんな事ができたかなと思っています。

吉村：38年という長い年月の中で、長居、舞洲の利用者に育てられ良い事も悪い事もみんな教えてもらつてここまでやってこられた本当にありがとうございました。

私は岸和田生まれの岸和田育ちでだんじり大好き、勉強大嫌いというような、大阪体育大学ではサッカー部に入っていました。「まり」ばかり追っかけ勉強はやっていなかったのが留年寸前でした。～中略～ 4年生の12月まで試合がありました。私は教師になりたいくて、とにかく子ども達にサッカーを教えたくて中学校でも高校でも良いから入つて教えたいという気持ちが強かつた。如何せん、勉強をしていないから教師採用試験に落ちまして、たまたま父親の家のななめ向かいに福祉センターがあり、そこに1つ上のサッカー部の先輩がおられて「先輩！就職がないんやけど、どこか紹介して」というと長居にこういうスポーツセンターができるけれど行くかという事で、「障害者のしょの字」も知らないけれど勤められるのだったら良いかと思ひ行きました。藤原先生と面会するのに履歴書をもってこいという事で就職出来ることになり、今では考えられないことなんですけど… ～中略～ 就職後、私は泳ぐのは泳げたし、ある程度指導もできたのですが、両足の無い今の水泳クラブおよごう会の西原さんが初めてプールに来られて「先生、水泳教えて」ということで両足の無い人にどのように教えられるのかなと思ひ、その当時は本もないし指導者も誰もいなかった。だけど、まずは一緒に入りましょうかという事で泳ぎだすと両足ない方がよく浮くんですね。バタ足するのもないし、割とすつと入つて行けたので、こういう風に教えていつたら良いのかなと、ただ、障害というのは始終たくさんの障害があるので簡単にいかなかつた事もありました。～中略～ 私が入つてきたきっかけは、たまたま教師採用試験に落ちたからこの世界に入つてきた。それが良かった。理想に燃えて入つてきていたらギャップが大きすぎて早く辞めていたと思ふ。違和感なく入ることができたから、ここまでこれたかな…。38年いろんな事がありましたが、大変おもしろい仕事だったと今は思っています。

松本：何かまとめて頂いて…まだまだ時間はありますので。スポーツセンターが日本で初めてですが、施設はできたけれど、利用者を集めるのに最初は苦労されたのでは。

吉村：苦労されたのは藤原先生で我々は手足となって動くだけなので、ただ藤原先生がいつも言っているのはスポーツ振興というのは場所があつて、指導者がいて、仲間がいて情報が共有できるということだ。センターという場所がある、1つ目クリア。指導員もいる2つ目クリア。仲間がいないという事で卓球、アーチェリー、水泳の3つぐらいの教室をすぐ立ち上げました。その卒業生たちを組織化しました。

アーチェリークラブ、水泳クラブ、卓球クラブその当時の障害のある方というのは20代、30代の方が非常に多くて、仕事が終わると来て、連携が上手くいき、組織的にクラブが大きくなって利用者数も増えてきました。開館当初は人が来なかつた。舞洲も同じでオープンして1日に一人。長居の例を知っていたので心配しなくても増えてくると思ひしていました。今プロジェクトという事で各区に出ているが、その当時もあゆみ号にアーチェリーの巻きわらを積んで指導に行つていた。ネットも張らずにやつていたので今思うと怖い事やつていたなあと思ふ。何か所が行き、長居スポーツセンターが出来ましたと広報活動もやりました。

小林：私は一番最初に担当した部屋は体育館でした。誰がきて何をしたいのかな？どう教えたらいいのかな？とドキドキしながら居た記憶がある。少しずつスポーツ好きな障害の方が結構集まつてきた。その当時は卓球をやっているような障害者の方が集まつてきた。仲良くなって集まつてくるように、また興味を持たれた方が仲間に入つてきたりというようなことで増えていった。

松本：施設は日本で初めてですが、卓球などは施設ができる前からできる人はいたのですか

小林：何人かはやつておられた

松本：先生達の最初のころは障害者スポーツの関わりもなかつたし、知識もなかつたと思ふのですが競技ごとに工夫されたことは

吉村：私は高校の時、卓球をしていた。大学はサッカーです。卓球は比較的指導もできる方だったので、指導員間も仕事が終わつた後に指導していた。少しでもレベルを上げようということをやつていた。～中略～ 自分で言うのも何なんですけれども水泳50m32秒で泳いでいたし球技も得意。バトミントンやボウリングも出来た。ということでそんなに苦にならなかつた。ただ、さまざまな障害のやつてはいけない事を覚えていくというのが非常に難かつた。

やつてはいけない事で印象にのこつているのは、骨形成不全の子どもさんが親御さんと一緒に来てプールに入つてきて、その子を抱こうとしたとき、「さわるな」と大きな声で怒られた覚えがあります。わざわざプールに入れようかな思っているのに頭ごなしに怒られるのかなと思つたら骨形成不全ですから、触つたら骨が折れてしまう、障害のことをもっと理解しなければいけないなとその時思ひました。

小林：やつた事のないスポーツはすごく新鮮な感じてした。知らないことは基本やその部分から自分なりに本を読みながら覚えていった。当時はそれなりにこなしてスポーツをすぐ覚えて、すぐ上手になる。たしかに器用でした。

松本：私自身は障害者スポーツに関わつたのが、このスポーツセンターができて10年後位に大阪市のスキー教室に指導員として参加させてもらったのが初めてだった。脳性麻痺の方が滑られるところを見て感動しました。先生達はスキー教室で何かご苦労はなかつたですか

小林：私もどちらかと言うとスキーは苦手です。視覚障害者の班を担当し全盲の人を3人連れて、今ではマンツーマンでやつているのですが、当時は指導者がいなくてひとりで全盲の人を担当したように思ひます。逆に考えるとほとんど滑らせていかなかつたかな。もうひとつ、両膝に人工を入れた年配の女性が来られてドクターからは絶対に転倒させないようにと言われたが、本人から最後だから行かせて欲しいということで担当した。宿舎前の斜面をバックボーンでスキーの先端を持ち下まで降りたら、しばらく腰が伸びなかつた。

吉村：感激した事でも良いですか

1992年のバルセロナあたりの年までは感動したり感激したりしました。それ以降はほとんどありません。ただ重度の脳性麻痺の方のポッチャーとかはすごいな、なぜあの緊張から、あそこにボールがピタッと止まるのかなどは非常に感動します。パラリンピックも何回か行きましたけれど、センターポールに君が代が流れて日の丸が上がる時は感動します。後は仕事の中で感動することはほとんどないです。競技者としての目で見つてしまうので障害というのは抜きにして速いか遅いか、テクニックがあるかないかという見方をするようになりました。

松本：先生達はパラリンピックも含めてかなり海外の大会に行かれたと思いますが、海外の選手を見て、驚いたり目からうろこという風な記憶経験はないですか

吉村：外国選手に関してはあまりないです。

1984年初めてイギリスのストックマンデビルに行かせてもらった。私もまだ若くて50数名の車椅子の選手を連れて一緒に行きました。我々の仕事というのはバリアフリーの中で働いているので担ぐということは一切ないです。だから日本の中でも、昔の厚生労働省に挨拶に行った時など50数台の車椅子をトラックに入れて、50数人をバスに乗ってもらう。その時は若かったので、若いバスケットの女子を担ぐのに遠くへ顔を離れた状態で担ぐと2人位で腰にきてしまった。先輩の担ぎ方を見てやっぱりぐっと巻き付け担がないとだめなんだなと経験させてもらいました。

小林：フェスピックに行かせてもらった。インドネシアの大会で水泳のコーチで行きました。オーストラリアの大腿切断で100mを1分以内で泳ぐような選手が居て体も非常にごつい。飛び込んで浮き上がって泳ぎだしたらモーターボートが動いているような、我々が泳いでいる横でモーターボートが走っているなどそれぐらいの感じがする。同じ障害者でもケタがちがうなという感じを受けた。

吉村：我々の38年を勉強しても参考にならない。できた当時の昭和49年というのは社会背景、環境というのは障害者が町へ出てスポーツをやる環境、背景ではなかった。かえって出てくるのが何か奇異な目で見られるという時代だったので。（今はそういう事はない）その中で、長居スポーツセンターに集まって来て障害のある方がスポーツをしていくというお手伝いを我々が38年間できたという事は非常に自分にとっては喜びであったと思います。仕事の中では確かにいろんなプレッシャーはありましたが、さすがにしんどいなと思うのはあまり記憶にない。今後、舞洲の宿泊施設が廃止ということ、長居障害者スポーツセンターも平成28年4年後に老朽化という事で建て替えできない、そのまま廃止するという動きがあるようで、やはりそういう事を我々がどういう動きをしていけば長居が残るのか、日本で最初に出来たところだから残すのではなく、年間60万人を超える人が利用している。延べ数ではなく実数でいうと約30万人の方達が利用している訳で、ここを造った目的というのも当然あるし、古くなってきたから、建て替えるお金がないから廃止、そんな考え方は自分の気持ちとして受け入れられない。たくさんの指導者がいて、たくさんの利用者が来られてという事で今後どういう動きをしていけば長居の廃止がなくなるのか、廃止になれば非常に困る障害の方がたくさんおられるし、ここがあるため健康で精神的にも肉体的にも健康で生活している人がたくさんいます。～中略～ 舞洲スポーツセンターの宿泊施設に関して、重度の人達がファミリーとリラックスして宿泊できるというのが元々のねらいじゃなかったのかなと思います。いろいろな方法で赤字を少なくして行って継続し、そこを宿泊施設として運営していくような状況をいろんな意見を出し合って続けていけるようにこの会も考えてほしいです。長居が無くなると大変です。舞洲だけになるとまた飽和状態になり、遠いところまで車とか移動手段がない人は使えない。これから先をどういうふうに障害者スポーツを振興して発展させていくのかというのが大事だと思う。

小林：同じく、これから障害者の人に対してどうしていくのですか？我々だけじゃなく30万人なぜこの様な多くの方が来ているのか、真剣に考えないと。

松本：最後になりますが、これから先どういう形で関わっていかれますか

小林：38年という長い年月ですが、私にとってあつという間の38年でした。全国大会でもゆっくり見に行きたいと思います。個人的になるのですが、家内も3月末で退職なのでゆっくりしよう。これからどうするかという事も含め、ゆっくりしたいです。

吉村：聞かれています。見られています。

誰が見てたり聞いていたりするかわからない。だから自分の言動や行動には充分気をつけなさい。と現場には言っていた。後は情報を共有しなさい。と言っている。

個人的には、日本身体障害者陸上競技連盟理事会の承諾を得て陸上の事務局を舞洲でやっていたことを自宅に持って帰っています。近畿のアーチェリー連盟は職員がやってくれているので、足りないところだけ補助する。

しばらくは、体を鍛えて、今年の終わり位にはどう動いていくのか考える。

松本：ありがとうございました。

協議会だより

平成24年9月20日 第68号

発行・編集 大阪障害者スポーツ指導者協議会 広報部

大阪市東住吉区長居公園1-32 大阪市長居障害者スポーツセンター内

FAX 06-6697-8613

<http://osaka-adspo.org/>

第12回全国障害者スポーツ大会 んぶ清流大会

輝け はばたけ だれもが主役

平成24年10月13日(土)～10月15日(月)

大阪府、大阪市、堺市の代表選手は大会に向けて練習をがんばっています。競技によっては府と2市が合同練習をしたりメダルを獲得することを目標に励んでいます。

みなさん、熱い応援をよろしくお願い致します。

年次総会の報告が遅くなり、申し訳ありません。役員改正につき報告させていただきます。

●大阪障害者スポーツ指導者協議会 平成24年度役員

★会長：松本 晃 ★副会長：鈴木 光一 増野 慈一 ★会計：川本 敏一

★事務局長：兼田 里香 ★部員：森近 久子 新川 豊美 久保 漣

★広報部長：松浦 春代 ★部員：永島 久義

★研修部長：中野 薫 ★部員：福西 拓也 加島 多美子 高橋 実代子

★企画部長：松田 恭子 ★部員：相原 繁樹 菅原 智彦 長谷川 伸二 武田 政治

●平成24年度 事業計画(案)について

★事務局：各種ボランティアの要請・各種発送業務について迅速に対応・対処することとしたい。また協議会の会員が意欲的にボランティア活動やスポーツ指導をして頂けるよう努力したい。

★広報部：年2～3回広報紙発行の継続。大阪障害者スポーツ指導者協議会としての特性が出る広報紙を作成できるよう努力したい。

★研修部：障害者スポーツ指導の実践で役立つ内容と、日本障害者スポーツ協会が定める競技種目を中心にした研修を年1～2回行いたい。

★企画部：大阪障害者スポーツ指導者協議会として、障害者スポーツのイベントや大会が行えるような企画・案を考え実行できるよう努力したい。

◇ 協議会だよりは、平成24年度から希望者のみに発送されます。

◇ 平成23年12月24日にホームページがリニューアルされました。

ボランティアに行ってきました

平成 24 年 8 月 25 日（土）大阪市舞洲障害者スポーツセンターでエンジェルの会による「水中リラクゼーション」の水泳講習会がありました。

大阪障害者スポーツ指導者協議会から 9 名のボランティアが参加しました。

アンジェルマン症候群の子ども達で親子水泳のサポートです。

アンジェルマン症候群により、陸上での運動はなかなか思いきってできないが、水中リラクゼーションは水の浮力・抵抗を利用し骨盤に動きをつけたり、各部位のストレッチができる。また、睡眠障害の人も夜寝る事が出来る等です。

指導者協議会の 9 名のボランティアも、講師山田先生の指示で介助を行いました。

子ども達は水を怖がることもなく元気いっぱい、そしてすごく楽しんでいました。

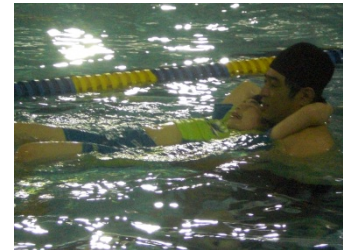
（広報：松浦）



指導者協議会から 9 名



水の中は怖くないよ



ゆ〜ら、ゆ〜ら
リラックス(^ ^)



いい感じ(^_^)



ビート板をもって、
バタ足 ニコッ！



水の中はすごく気持ちがいいよ(^_^)v



体は仰向けに頭は肩の上、ゆ〜らゆ〜らとリラックス。水中での抱き方により股関節などの可動域が広がるなど楽しみながら運動ができています。ボランティアさんも一列に並び子ども達をリレーでスイスイ送り出し(^ ^)/

アンジェルマン症候群とは (エンジェルの会 HP より引用)

1965年、英国の医師ヘリー・アンジェルマン (Harry Angelman) 博士が報告した、比較的最近解明された病気です。(まだ未解明な部分は多々ありますが^^)

15番染色体上の一部の遺伝子の欠失症です。その殆どが突然変異によるもので、約20000~30000人に一人の割合で生まれると言われていています。通常の染色体検査では見つからないので、発達が遅れていて、この病気に一致する症状を持っていても、この病気だと診断されるまでに至ることは容易ではありません。

症状

- 発達の遅れ。
- 言語障害(発語は無いか、あってもわずか)。
- 動作や平衡の異常。
- 特異な行動(特に特徴的なのが、見るからに幸せそうな笑顔^^。
手をはばたかせる、多動、集中力に欠ける etc)
- 頭囲の増加の遅れ、または不均衡。
- 痙攣。通常、3歳までに発症。
- 脳波異常。高振幅徐波が特徴的。
- 斜視。
- 皮膚や眼球の低色素。
- 舌を突き出す、吸啜や嚥下の異常。
- 腱反射の亢進。
- 乳児期の哺乳・摂食障害。
- 歩行中に腕を持ち上げる。
- 下顎の突出。
- 熱に対する感覚過敏。
- 大きな口、間隔の空いた歯。
- 睡眠障害。
- よだれ。
- 水が大好きで惹きつけられる。
- 噛んだりもぐもぐする動作の過剰。
- 後頭部扁平。

etc…でも生命予後は良いのです。長生きでき、元気に成人されている方はいっぱいいらっしゃいます。

2012年スペシャルオリンピックス日本・大阪夏季地区大会 水泳競技の部 長谷川 伸二

今回は、水泳大会に参加しました。大阪障害者スポーツ協議会からは、3名参加しました。(召集・誘導が2名、入退水が1名) この大会は、大阪の参加者の他に、兵庫県、奈良県からも参加がありました。

SONは、知的発達障害者のある人に、日常的なスポーツを通じて、自立や社会参加の目的として、競技会を提供しています。オリンピックスのその複数形は、いつもどこかで活動しているという意味らしいです。

他の大会と違うところは、選手1人ひとりがゴールすると拍手があり、15M歩行競争や補助具付きの競争など、誰でも参加しやすい様にされていました。

今回残念だなと感じたことは、更衣室は無く男子トイレもわかりにくく、天井がガラス張りで直射日光が入り暑くて体力も限界近くになりました。